

圏外のアンテナ

[パリの悟空]の巻

働き方改革などという言葉のなかった80年代。

「仕事を覚えてからだろ！」と怒鳴られるのを覚悟で、社会人2年めの秋、上司に夏休みが欲しいと申し出た。

残業代をためたお金で、どこか海外に行ってみたいと思ったのである。意外にもあっさりOKが出て、はじめてのスペインとフランスへ出発。

異国の地では、「上を向いて歩こう」がよく流れた。聞き慣れたメロディーにふと耳を止めて、音の発生源の方を見ると、レストランのピアノ弾きがウインクしていたり、電車に乗り合わせた人が微笑んで歌いかけていたり。

きっと、日本人のわたしを見かけてあの曲が頭に浮かび、小さなオモテナシをしてくれたのだろう。

さて、先月、所用で出掛けたパリは、それから35年ぶりのパリだった。

そして今回よく耳にしたのは、「ドラゴンボール」という言葉である。

オルセー美術館の入場口では、190cmを優に超える黒人の係員が、「子どもの頃、日本のアニメに夢中でさ。鳥山明（ドラゴンボールの作者）が大好きでね」と、英語で話しかけてきた。

タクシーのドライバーは、「昨年、サッカーの試合で、パリ・サンジェルマンのスタンドに、ものすごく大きな悟空の絵を掲げたんだ。そしたら、世界中から驚かれちゃって」と、恥ずかしそうに笑った。

クールジャパンとか悦に入るのは、かっこ悪いし、ダサイと思う。

だが、日本のアニメにハマって育った異国の少年たちが大人になって、自分の場所を生きながら、今もずっと好きでいてくれる。その事実には胸が震える。

そうそう。パリのバス停にも悟空がいた。マクドナルドの広告だったが、原色の少ない街で、パッと目を引くオレンジ色の道着姿で、変なポーズで立っていた。

=2019年3月22日掲載=



パリのバス停で、ドラゴンボールの主人公・悟空がフュージョンのポーズ